



文明と環境の問題

人と自然の関係を考える上で、人類史の最初の大転換は、最終氷期が終了した約1万年前に開始された農業革命でした。エジプト、メソポタミア、インダス、黄河・長江地域の古代文明は有名ですが、いずれも適当な気候（光と気温）と水と肥沃な土地を前提にした穀物栽培、すなわち農業の成立が、その前提になっています。農業の維持は、人間が定住して食料を確保できる仕組みとしての基本であり、それによって都市や国といった社会の形成が可能となったといえます。

一方で皮肉なことに、長い年月にわたるこうした人類の営みそのものが、多くの古代文明を終焉させた大きな環境要因のひとつにもなりました。穀物栽培を同じ土地で毎年繰り返して行うことによる地中への塩分の蓄積、農地の拡大や都市化のための森林伐採による砂漠化などによって、農業を困難にしてしまったからです。

農業革命の次に起こった大転換は18世紀西欧での産業革命です。工業化と都市文明を中心とする「近代化」は、石油・石炭などの化石資源の使い過ぎによる「地球温暖化」を引き起こし、地球規模で現代の文明を脅かしているともいえます。さらに、「近代化」は、持てる国（地域）と持たざる国（地域）の格差を広げており、環境悪化を引き起こしてきた持てる国に対し、持たざる国がノーをつきつけているという、地球社会の構造も作り出しています。

そもそも人類はなぜ自らの生存基盤である地球の環境を変えてしまうのでしょうか。環境問題の本質には、人類が作り上げてきた文明とは何か、という大きな課題があるのです。

モンスーンアジアの課題

長く、文明と自然の共生を続けられた地域もあります。わが国を含む東アジアから東南アジア、そして南アジアの「モンスーンアジア」とよばれる地域です。この地域では湿潤なアジアモンスーン気候が支配し、雨季乾季の季節変化や地形を利用した水田という独特の方式の稲作農業が数千年以上続き、中近東や黄河地域での古代文明とは異なり、すぐれて持続可能な文明を可能としてきました。そのため、西欧の産業革命以前から、この地域は人口や生産力も世界で最も大きい豊かな地域となっていました。私たちのこれまでの研究では、湿潤なモンスーン気候の維持に、チベット高原などの山岳効果に加えて、陸地を広く覆う森林、そして水田そのものも、大きく効いていることが分かってきました。

しかし、水田稲作農業とそれに伴う高度な伝統的文明を維持してきたこの地域は、西欧由来の資本主義経済と科学技術の受け入れによる「近代化」の進行も速いものでした。特に20世紀後半以降は、工業生産に伴う温室効果ガスの急増や大気汚染の進行、森林伐採による生態系劣化や地域降水量の減少など、地球環境への負荷でも世界のホットスポットとなっています。モンスーン気候の地域では、気候と地表面の植生との相互依存性が強いため、人間活動による森林破壊などの植生の改変などにより、その地域の気候も容易に変わってしまうという特性もあるのです。

人と自然の関係の再構築を

今、人と自然の間の、より持続的な関係を取り戻すためには、人類も生命圏の一員であり、地球と共に生きるという人類を意識した文化の創成と新たな科学・技術の展開が必要です。「無限の成長」ではなく、アジアの伝統的知でもある「足るを知る」にもとづき、多様な自然と共生できる水・エネルギー・食料の循環型システムを基本としたネットワーク型社会をめざしていくべきでしょう。

京都には、海・森・山・川など豊かな自然と生業、千年の都で培われた伝統と文化があります。これらの相互のつながりを生かした未来に向けた地域社会の新しいモデルを、世界に先駆けて創っていくのではないのでしょうか。総合地球環境学研究所（地球研）では、このような多様な地域と地球全体をつな

げる、人と自然の未来への可能性を、地域社会とも組んで、さまざまな角度から探っています。

「京都新聞 夕刊 2019年4月10日に掲載」

写真1：モンスーンアジア特有の水田風景（愛知県新城市の四谷千枚田）。日本ではこのような山間地での棚田が江戸時代から続いている。



写真2：京都の都市景観の一部をなす鴨川。四季折々、市民の憩いの場と鳴っている。

